

## SS11-3 病理医の働き方改革の隘路とデジタルパソ

ロジー

Can digital pathology solve the bottleneck of pathologist work style reforming?

大城真理子<sup>1)2)</sup>

1)名桜大学 人間健康学部 健康情報学科、2)日本病理学会 男女共同参画・働き方改革委員会 委員

Mariko Oshiro

Department of Health Informatics, Faculty of Human Health Sciences, Meio University

一般的な臨床医の業務と比較し、病理医は夜間休日の当直がなく急患対応もないため、ワークライフバランスが良好で働き方改革は不要と誤解されることがある。しかし、医学の発展によって病理診断を必要とする患者数、病理診断件数は増加し続けており、病理診断に必要なプロセスも複雑化している。そのため病理医には質的、量的に過剰な労働負荷が生じており、改正労働基準法に則った「医師の働き方改革」は病理医にも必要である。忙しく日常業務を行っている病理医が、病理診断の質と量を下げることなく、自分たちの働き方を改革するのは決して容易ではない。デジタルパソロジーに病理診断の未来があるのは明らかであるが、最も抵抗を示すのは病理医ともいわれている。本発表では病理医の働き方改革のボトルネックおよび病理医がデジタル化に抵抗を示す理由を考察し、関連する日本病理学会の動向および今後に向けた取り組みを紹介する。